

メキシコ ブルーベリーの輸出見通し

EastFruit 2025年4月28日

主に米国とカナダの市場を対象とし、メキシコは急速に世界有数のブルーベリー輸出国の1つとなった。メキシコの2022年の生鮮ブルーベリーの輸出量は前年比微減(-2%)の7万1,509トンにとどまった。米国農務省(USDA)の推計によると、メキシコの2023年の生産量は推定7万4,800トンに達した。これは新植と生産技術の革新による収量の向上によるものであり、前年比12%の増加となった。同省は、2024年の生産量が8万1千トン(8%増)に達したと推定しているが、メキシコは世界市場でペルーとの激しい競争に直面しており、拡大はやや鈍化している。実際、冬の期間のペルーからの輸出は、春先に高値で取引されていたメキシコの従来からの出荷期間を侵食している。そうは言っても、メキシコは特に米国産が入荷する前の冬と春の端境期の米国市場に生鮮ブルーベリーを提供する上で不可欠である。

メキシコのブルーベリー輸出の約97%は米国向けで、これは地理的な近さとUSMCA/NAFTA(米国・メキシコ・カナダ協定/北米自由貿易協定)の下での有利な貿易枠組みを反映している。メキシコ産のベリー類は、数日以内に(テキサス州やカリフォルニア州にトラックで運ぶ場合は数時間以内にも)米国の小売店の棚に並ぶことができるため、海上輸送が必要な南米産よりも鮮度が優れている。これによりメキシコは、主に1月から4月にかけてと、晩秋に再開する「シーズン中」の供給について、確固たる地位を築くことができた。

メキシコの輸出業者は近年、限定的ながら他の市場への多角化に着手し、ヨーロッパやアジアへの少量の輸出が試みられているが、米国は引き続き2030年までの主要な買い手となるだろう。米国の1人当たりブルーベリー消費量は増加を続けており、メキシコにとっての市場が拡大している。注目すべきは、メキシコからの生鮮ブルーベリーの輸入が米国市場で国内産を補完していることで、意外にも、冬の時期にはペルー産やチリ産が主体と見られる約2万トンのブルーベリーがメキシコに輸入されており、これはメキシコが輸出国であると同時に(米国向けの)中継地でもあることを示している。

メキシコの気候と生産システムにより、特定の地域(メキシコ中部の高地やバハカリフォルニア州など)では連作が可能である。業界は、極端な天候から保護し、出荷シーズンを延長するため、遮光ネット、トンネル等による保護された栽培や(土を使わない)基質栽培に投資してきた。一方、水利用の可能性が問題となる場合があり、一部の地域では干ばつにより生産者が苦境に立たされたが、2023/24年度は栽培の拡大に十分な水が供給された。これらの投資と恵まれた自然の結果として、メキシコの実産量は毎年緩やかに増加を続けると予想されている。予測によると、メキシコは2020年代後半までに年間生産量が9万~10万トンに達する可能性があり、国内消費量も多少増加するとすれば、これはおそらく7万~8万トンの輸出量に相当する。

メキシコにとっての逆風の1つは、世界的な価格環境である。ペルーの存在によりブルーベリーが豊富になったため、メキシコの輸出の成長率は鈍化している。それでも、技術革新と品質改善はメキシコの戦略の中心である。この業界では、多くの場合にドリスコルズ社のような世界的なベリー企業との提携を通じ、改良された品種を迅速に採用してサイズと風味の特性を改善している。収穫後の取り扱いも重点な分野であり、輸送時間が短いため、メキシコ産のベリー類は非常に新鮮なまま届くことが多く、品質が維持されている限りこれは競争上の有利性である。

要約すると、メキシコは、トランプ政権によって課された新たな関税にもかかわらず、引き続き世界の3大輸出国の1つであると見られ、米国の出荷シーズン以外における北米での供給の要である。メキシコのブルーベリーセクターは、ペルーの指数関数的な成長には及ばないかも知れないが、米国の旺盛な需要に支えられて2030年までの堅調で持続可能な成長軌道に乗っている。

(この文は、EastFruitの記事「メキシコとスペインの見通し: 異なる大陸のブルーベリーの双子達」の中のメキシコに関する記述の翻訳です。)